

—論文—

## 狩猟の雪室の二類型

——福島県只見川流域と野尻川流域を事例として——

後藤麻衣子

Two types of Yukimuro that people make for hunting

——An example of the Tadami basin and Nojiri basin in Fukushima Prefecture——

Maiko Goto

Our paper report the practical Yukimuro in the Tadami basin and Nojiri basin in Fukushima Prefecture that people make for hunting and We examine the Yukimuro of the regional features and the primary factors.

We discovered that there are two types of Yukimuro. First, people make Yukimuro to stay if they don't go back a shed or they can't find a cave during the hunting season. Second, they make Yukimuro to hide themselves from quarry, for example a copper pheasant and a ginant flying squirrel.

The region of making the First Yukimuro is located in the upper reaches of stream and they have not many cultivated land as compared with the region of meking the Second Yukimuro. Therefore, people who live the region of making the First Yukimuro go the genuine hunting with staying, they make the First Yukimuro to stay for a few days.

### 1. はじめに

雪室<sup>1)</sup>には、豊作祈願である鳥追い行事<sup>2)</sup>などで行事の前後に飲食する場として使用される場合と狩猟時に泊まるために設営される雪室がある。両方とも生業に係わっており、生活の一部として存在していた。そのため、農業や狩猟の衰退とともに、雪室も変化していき、今では観光行事<sup>3)</sup>の中で作られている。

従来の雪室研究は、調査対象地域が秋田県や新潟県の一部に限られており、研究の中心は①「カマクラ」語源<sup>4)</sup>②横手の水神祭り<sup>5)</sup>③雪室の変遷<sup>6)</sup>であった。それらは、すべて行事の中

で作製されている雪室であり、狩猟時に設営する雪室の研究はされてこなかった。また、狩猟研究においても、その中心は狩人の系譜<sup>7)</sup>や儀礼<sup>8)</sup>、狩人の集落<sup>9)</sup>に関する研究であった。さらに、その中で狩猟方法に関して論じた研究<sup>10)</sup>もあったが、その対象は巻き狩り<sup>11)</sup>やトヤ待ち<sup>12)</sup>であった。このように、雪室研究に限らず、狩猟研究の面からみても、狩猟時に設営される雪室を取り扱った研究は存在しなかった。それはこれまで、狩猟研究者の多くがその地域の自然環境によって、狩猟方法が異なっている点に注目してこなかったのが、主要な原因であると推

測される。特に、雪国では狩猟期間が冬季であるため、雪を切り離して考えることはできない。狩猟の雪室はそういった自然環境の中で、発達してきたものである。

そのような意味で、本稿では狩猟の雪室の解明に力を注ぎたい。調査対象地域を福島県只見川流域と野尻川流域<sup>13)</sup>に限定したのは、第1に只見川流域と野尻川流域の雪室の研究がなされてこなかったこと、第2に只見川流域と野尻川流域には江戸時代に『会津風土記 風俗帳』(庄司編 1970、1980)が編纂され、明治末期から昭和初期にかけて作成された『郷土誌』<sup>14)</sup>が残されているため、江戸時代から現在までの変遷が辿れること、第3に、田子倉や石伏などの会津の狩人(鉄砲ぶち)は秋田マタギと交流があったことから、今後、秋田マタギとの関係の解明

に繋がる可能性があることが挙げられる。

本稿では、雪室がまだ狩猟時に用いられていた昭和初期における狩猟時の雪室を研究対象とする。まず、雪国全域における狩猟時に設営される雪室の分布傾向を示したい。その中で、特に只見川流域と野尻川流域の雪室の事例を取り上げ報告する。それらの事例を通して、雪室の特色を見出していき、またその雪室がなぜその地域に作られたのかそれぞれの雪室が作られる地域の違いからその要因を試みる。

## 2. 狩猟時に作られる雪室

以前、狩猟を営んでいた者は存在した。彼らは狩猟時に雪室を設営していた。そこで、古老の狩人による聞き取り調査の結果、次の6地域において、かつて狩猟時に設営された雪室の様

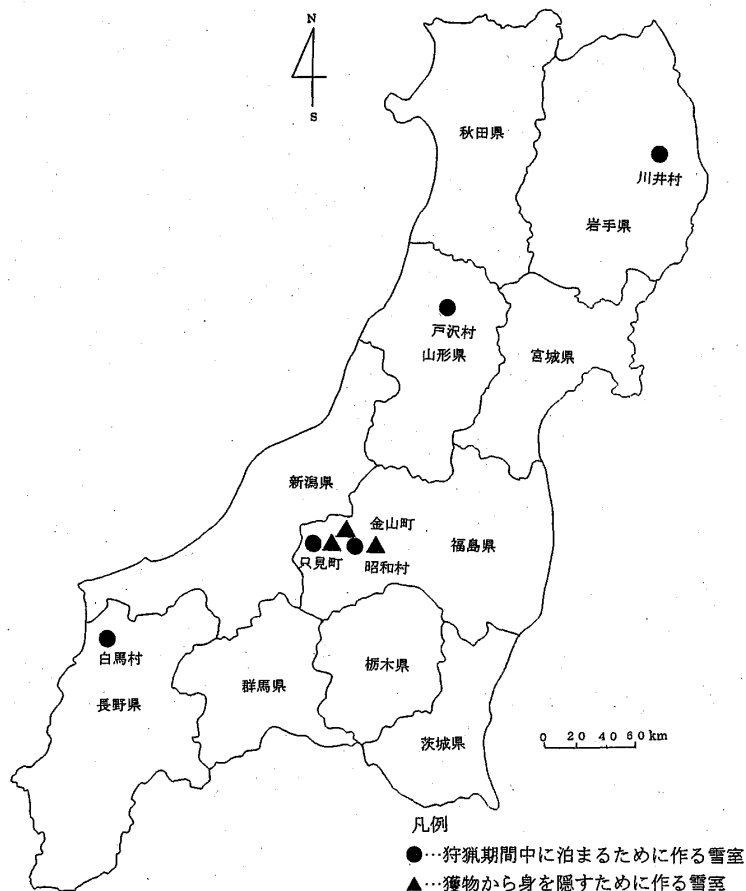


図1 狩猟の雪室の分布  
(現地での聞き取り調査及びアンケート調査により作成)

子が判明した。その地域は、岩手県川井村、山形県戸沢村、福島県只見町と金山町、昭和村、長野県白馬村<sup>15)</sup>である。

まず、雪室の名称を見ていくと、ユキアナ<sup>16)</sup>、ユキゴヤ、トヤ、バンドウ、ユキドウの5つの名称がある。ユキアナは川井村と昭和村、白馬村であり、3村の間は、かなり距離が離れている。ユキゴヤ、ユキドウ、バンドウは只見町に限定され、外形は集落によって違っている。トヤは金山町と只見町、昭和村である。戸沢村では名称は不明である。以上の事例から、名称に関してはユキアナが多く、かつ広範囲にわたっていることがわかる。

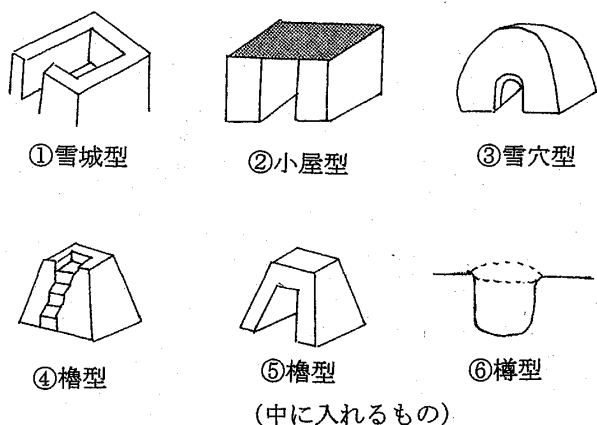


図2 雪室の形

〔出典〕 稲雄次『カマクラとボンデン』秋田文化出版社 1990、及び現地での聞き取り調査などにより作成

次に雪室の外形を取り上げる。外形は2種類見られる。1つは樽型である。この形式は川井村、昭和村で見られる外形である。樽型の変形と見られる屋根付きの樽型は戸沢村と只見町である。雪穴型は只見町と金山町、昭和村で見られる形である。白馬村では形は不明である。以上のことから、屋根の有無の差はあるが、横に穴を掘っていく雪穴型よりも下に掘っていく樽型のほうが多く、それは広範囲にわたっていることが判明した。

雪室の利用形態を大別すると2通りになる。

1つが、狩猟期間中に宿泊を目的として設営する雪室である。この雪室は小屋に帰れなくなったり、洞穴を発見することができなくなったりした時に作った。泊まり小屋としての雪室が設営された地域は、川井村、戸沢村、只見町、昭和村、白馬村である。図1を見ると、岩手県から長野県まで広範囲にわたって分布している。これらの地域に共通して言えることは、熊などの大型獣を狩猟対象とし、泊りがけの狩猟を行っていることである。上述した地域の雪室の多くが、4～5人ほど入れる大きさの雪室であり、下にはゴザや蓑などを敷き、その中で火を熾し、仮眠をとったという。もう1つの雪室は狩猟対象物である鳥から身を隠すために設営する雪室である。この雪室は個人猟であるトヤ待ちの時に作った。その点からその雪室をトヤやトヤマチドウモンなど呼ぶ場合もある。獲物が止まる木の近くに雪室を作り、その中に入って獲物がくるのを待った。その多くは人が1人隠れる分ぐらいの大きさであった。そして、獲物がくるとそこから鉄砲で撃った。この雪室は只見町、金山町、昭和村で作られていた。

このように、狩猟時に作製される雪室は、広範囲に分布していることが分かる。その分布範囲の中で只見川流域と野尻川流域に存在した狩猟時に設営する雪室を集落単位で報告する。集落単位で雪室を取り上げ検討するのは、上述した雪室における利用形態の二類型の地域性を明確にするためである。次に挙げる事例は、2001年から2005年にかけて実施した聞き取り調査から得た資料である。只見川、野尻川流域に沿って雪室を集落単位に調査した結果、11集落に狩猟時に作製される雪室が存在していたことが判明した。

#### 事例1 只見町田子倉<sup>17)</sup>

田子倉では、50軒のうち、13～14人ほど鉄砲ぶちがいた。ユキドウと呼ばれる雪穴型の雪室

表1 狩猟時に作製される雪室 一只見川流域と野尻川流域一

	標高 m	集落名	名称	形	大きさ	作る時期	雪室の使い方
①	650	只見町 田子倉	ユキドウ	雪穴型	5～6人入 れる程度	狩猟時に泊 まる時に作 る。	雪室の中に入って寝泊ま りした。
②	400	只見町 石伏	バンドウ	雪穴型	1人入れる 程度	トヤ待ち	雪室の中に入って泊まっ た。
③	400	只見町 叶津 蒲生	ユキゴヤ、 ユキドウ	雪穴型	4～5人入 れる程度	狩猟時に泊 まる時に作 る。	雪室の中に泊まった。
④	380	只見町 宮原	トヤマチ ドウモン	樽型	1人入れる 程度	トヤ待ち	鳥から身を隠して撃つ時 に雪室を作った。
⑤	290	金山町 西谷	トヤ	雪穴型	1人入れる 程度	トヤ待ち	雪室の中に入って、その 中から、山鳥を撃った。
⑥	290	金山町 中川	トヤ	雪穴型	1人入れる 程度	トヤ待ち	雪山に穴をあけて、入り、 そこから山鳥を撃った。
⑦	350	金山町 坂井	ドウ	雪穴型	1人入れる 程度	トヤ待ち	雪室の中に入り、山鳥を 撃った。
⑧	352	金山町 東中井	トヤ	雪穴型	1人入れる 程度	トヤ待ち	雪室の中に入り、山鳥を 撃った。
⑨	352	金山町 川上	ユキドウ	雪穴型	1人入れる 程度	トヤ待ち	雪室の中で隠れて待ち、 山鳥がきたら、 そこから鉄砲で撃った。
⑩	520	昭和村 喰丸	不明	雪穴型	1人入れる 程度	トヤ待ち	雪室の中に入ってバンドリ がくると、そこから鉄 砲でバンドリを撃った。
⑪	620	昭和村 大芦	ユキアナ	雪穴型	1人入れる 程度	トヤ待ち	雪室に入って、山鳥を撃 った。
			ユキアナ	樽型	4～5人入 れる程度	狩猟時に泊 まる時に作 る。	雪室の中で仮眠をとっ た。

(現地での聞き取りにより作成)

を設営した。秋に作っておいた木小屋に帰れない時に雪山に穴をあけ、松の枝をかけて、その中に入って寝泊りした。ユキドウはだいたい5～6人ぐらい入れる大きさであった。

事例2 - 只見町石伏<sup>18)</sup>

石伏では53軒のうち、3軒が冬になると狩猟を行った。バンドウと呼ばれる雪穴型の雪室を設営した。これはヤドリギの近くに雪穴を掘って、雪のブロックを作り、穴の両側に積み上げ、雪の屋根を作ったものである。その中に入ってバンドリ(ムササビ)がくるのを待った。バンドリがくるとそこからバンドリを撃った。

事例3 - 只見町叶津・蒲生<sup>19)</sup>

ユキゴヤ又はユキドウと呼ばれる雪穴型の雪室を設営した。木で作った小屋に帰れない時に雪室を作ってその中に入って泊まった。

事例4 - 只見町宮原<sup>20)</sup>

トヤマチドウモンと呼ばれる樽型の雪室を作った。これは鳥から身を隠して撃つ時に作った。この雪室は下に穴を掘っていき、上に白いシートなどをかぶせたものであった。

事例5 - 金山町西谷<sup>21)</sup>

西谷では、鉄砲ぶちは5～6人いた。トヤと呼ばれる雪穴型の雪室を作った。山鳥の捕獲

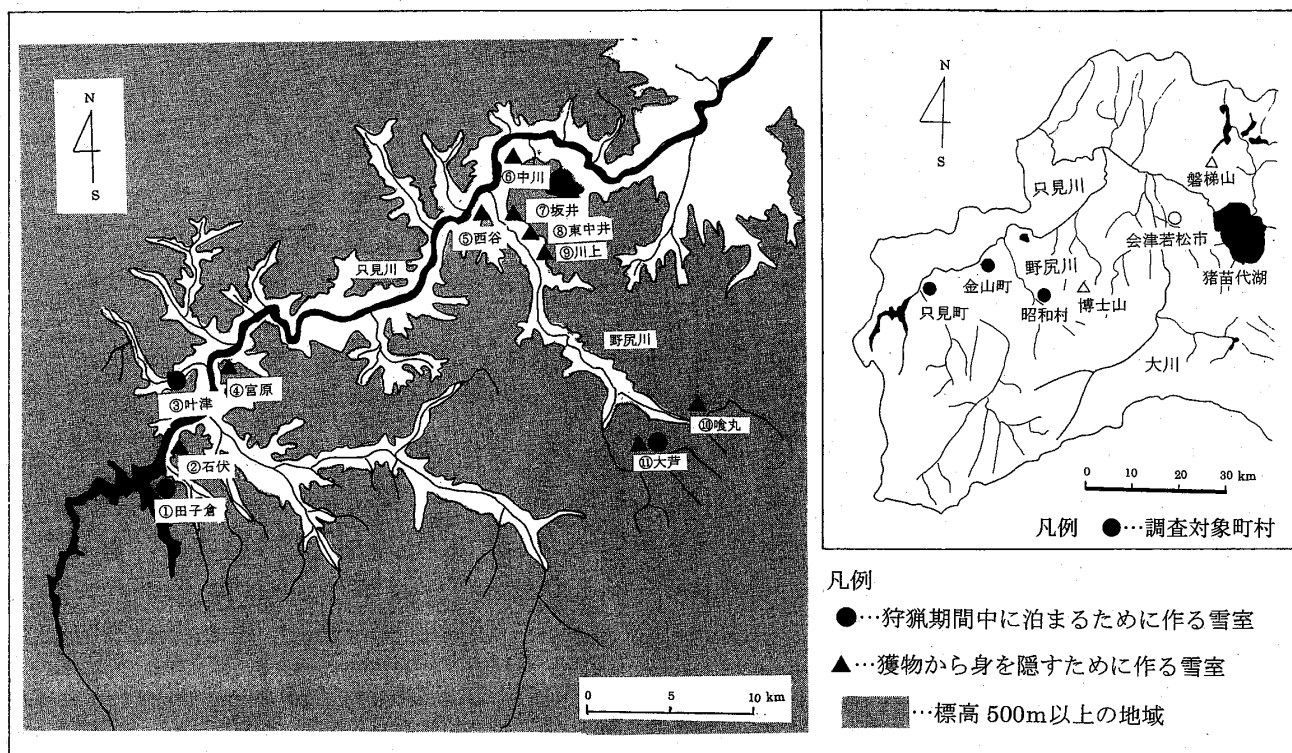


図3 狩猟の雪室の分布 一只見川流域と野尻川流域一

(現地での聞き取りにより作成)

(山鳥ぶち)の時に多量の積雪が見られる雪山に1人分入れる穴をあけ、そこから山鳥を撃った。

事例6 ー金山町中川<sup>22)</sup>

トヤと呼ばれる雪穴型の雪室を設営した。雪山に穴をあけて、そこから山鳥を撃った。山鳥は漆の木の近くによく寄ってきたので、その近くに作った。

事例7 ー金山町坂井<sup>23)</sup>

ドウと呼ばれる雪穴型の雪室を作った。山鳥が止まる木の近くの雪山に穴をあけ、そこに隠れて山鳥を撃った。

事例8 ー金山町東中井<sup>24)</sup>

東中井では鉄砲ぶちが3人ほどいた。トヤと呼ばれる雪穴型の雪室を作った。山鳥が止まる木の近くに人が入れるぐらいの雪室を作り、その中に入って山鳥を撃った。

事例9 ー金山町川上<sup>25)</sup>

ユキドウと呼ばれる雪穴型の雪室を作った。雪室の中で木の実を食べに来る山鳥を隠れて待ち、山鳥がきたら、そこから鉄砲で撃った。

事例10 ー昭和村喰丸<sup>26)</sup>

名称は不明であるが、トヤ待ちの時に雪室を設営した。バンドリが止まる木の近くの雪山に穴を掘って、中に入った。バンドリがくると、そこから鉄砲で撃った。

事例11 ー昭和村大芦<sup>27)</sup>

ここでは2種類の雪室が作られている。1つが、トヤ待ちの時に作る雪室である。山鳥が止まる木の近くの雪山に穴をあけた。そして鳥に分からないようにそこに入って山鳥を撃った。これは人が1人分入れる大きさであった。もう1つは、狩猟時に帰れなくなった時に泊まるために作る雪室である。熊ぶちの時は泊りがけで猟に行った。狩猟に出る時は4~5人1組で行き、猟の期間は洞穴や雪室の中に泊まった。雪

室は1組4～5人ほど入れる大きさに作った。枯れ木を燃やすと雪が消えて穴ができる。その中で焚き火をして仮眠をとった。

これらの雪室は、昭和初期に設営されていた雪室であり、現在は作られていない。

### 3. 雪室の地域性とその要因

これまで、取り上げてきた事例を検討すると、狩猟時に設営される雪室には二種類の雪室があることが分かる。それをまとめたのが、表2である。1つは狩猟期間中に泊まるために作る雪室である。それらの雪室は、ユキドウ、ユキゴヤ、ユキアナと呼ばれている。外形には樽型と雪穴型の2種類がある。この雪室は猟に出ている時に作り、その中で寝泊りした。もう1つは、獲物から身を隠すために作る雪室である。その時に作られる雪室にはバンドウ、トヤマチドウモン、ドウ、トヤ、ユキドウ、ユキアナの名称がある。雪穴型と樽型の2種類の雪室が作られている。この雪室は、山鳥やバンドリなどから身を隠すためにヤドリギの近くに雪室を作った。そしてその中に入って獲物に見つからないように待ち、獲物がヤドリギに止まったら、そこから鉄砲で撃った。

このように、狩猟時に作る雪室には①の狩猟期間中に泊まるために作る雪室（以下①）と②の獲物から身を隠すために作る雪室（以下②）の二種類の雪室があることが判明した。①が作

られる地域、あるいは①と大芦のように②の両方の雪室が作られる地域（以下A）と、②だけしか作られない地域（以下B）がある。なぜこれらの雪室がその地域に作られていたのか、それぞれの地域の狩猟方法や狩猟対象の獲物の種類、狩猟儀礼、山の神の信仰などの違いからその要因の解明を試みたい。

まず、A地域を見てみる。①の狩猟期間中に泊まるために作る雪室が設営される地域は只見町田子倉、叶津・蒲生、昭和村大芦である。また、大芦では②の獲物から身を隠すための雪室も設営されている。これらの集落は海拔高度400mから650mに位置し、只見川、野尻川の上流地域に位置する。この地域の狩猟方法は2種類あり、個人で行うトヤ待ちと共同で行う巻き狩りがある。A地域において、トヤ待ちの時に獲る獲物は山鳥とバンドリである。巻き狩りで獲る獲物は、兎、狐、熊、クラシシ（鹿）である。特に熊やクラシシを獲る場合は、泊りがけて猟を行った。泊りがけの猟はA地域のすべての集落で行われてきた。田子倉では狩猟期間中は秋に作っておいた山小屋に泊まって狩りに出かけ、帰れない時は雪室の中に泊まった。叶津・蒲生では秋のうちに、木で小屋を作っておき、狩猟期間中はその小屋から狩りに出かけていた。小屋に帰れない時に、雪室を作って泊まったり、洞穴の中に泊まったりして一夜を過ごした。大芦では、バンドリやクラシシを獲りに行く時は、

表2 狩猟の雪室の特色 一只見川流域と野尻川流域の雪室一

	①狩猟期間中に泊まるためにつくる雪室	②獲物から身を隠すために作る雪室
名称	ユキドウ、ユキゴヤ、ユキアナ	バンドウ、トヤマチドウモン、ドウ、トヤ、ユキドウ、ユキアナ
形	雪穴型、樽型	雪穴型、樽型
使い方	猟に出ている最中に、小屋に帰れなくなった時、雪室を作り、その中で寝泊りする。	山鳥やバンドリなどから、身を隠すためにヤドリギの近くに雪室を作り、その中に入って、獲物がくると鉄砲で撃った。

(現地での聞き取りにより作成)

新潟県の山奥まで行っていたので、泊りがけで猟に行った。猟の間中は洞穴に泊まったり、雪室の中に泊まったりした。

狩猟に関する儀礼は、A地域には見られる。田子倉では狩猟の初日は、新米、神酒を持って山に登り、サンジンサマを祀っている若宮八幡宮に参拝に行き、狩りに出る。この他にサンジンサマの「祝い」の日があった。11月15日と2月15日である。両方とも山に集り、神酒をあげて、酒を飲んだ。また、獲物が獲れるとサンジンサマに礼を述べた<sup>28)</sup>。大芦では熊が捕獲された時に「山の神送り」といって、山の上の方にある祠に、赤飯などを炊いて供えた。供える時に何か唱えごとをしたが、その文句は忘れてしまったそうである<sup>29)</sup>。その山の神の位置であるが、田子倉、大芦では集落の近くではなく、山の上の方に祀られている。

田子倉では狩猟期間中はヤマコトバ<sup>30)</sup>を使用した。特に「シ」は「死」に通じるため、「シ」がつく言葉を使ったら、山から降りて川に入って水を浴びなくてははいけなかった。

田子倉や大芦にはかつて狩猟に関する文書も存在していたらしい。だが大芦にはすでに残っていない。大芦の文書は話によると山のどこでも狩りをしていても良いという免許状のようなものであったようである<sup>31)</sup>。田子倉では『山立根元巻』<sup>32)</sup>という文書が残されている。

B地域は、只見町石伏、宮原、金山町西谷、中川、坂井、東中井、川上、昭和村喰丸である。これらの集落は、只見川中流地域、野尻川中、下流地域に位置する。狩猟方法は個人で行うトヤ待ち、共同で行う巻き狩りがある。トヤ待ちで獲る獲物は、山鳥やバンドリであり、巻き狩りで獲る獲物は兎である。この地域では、泊りがけで猟をすることはなかった。また、獲物が捕獲された時に儀礼を行うこともなかった。さらに山の神は集落の周囲に祀られており、家に

よっては屋敷神として祀っているところもある。

A地域とB地域を比較すると違いが見られる。Aは海拔高度の高い地域の中で作られており、川の上流地域に位置する。一方、BはAに比べて、海拔高度は低く、川の中流地域に位置する。AもBも個人猟、共同猟を行うが、獲物が異なる。Bで獲れる兎、山鳥、バンドリの他にAではそれらに加え、熊やクラシシも獲っている。この熊やクラシシは山奥にいるため、泊りがけの猟を行う。Aでは獲物を捕獲した時に儀礼があるのに対し、Bでは特にない。しかもAでは、狩猟に関する文書も残されている。山の神の位置に関してもAでは山の上の方にあるのに対し、Bでは家屋の周辺、または屋敷神として祀っている家屋もある。

このように、Aの雪室は泊りがけの猟を伴う本格的に狩猟を行う地域で作られている。これらの地域では、狩猟期間中に、洞穴や小屋に泊まって猟を続けていた。だがその洞穴が見つからず、小屋まで帰れない時に、簡単でどこでも作ることができるという雪の加工しやすい利点をもった雪室を作ったのである。

①の狩猟期間中に泊まるために設営される雪室と②の獲物から身を隠すために作る雪室はいつ頃から作られていたのかは不明であるが、①は昔から洞穴に泊まり、狩りをしてきたことから古くからあったのではないと思われる。②は鉄砲（火縄銃）を使用して獲物を獲るために作られることから、②は鉄砲伝来以降となる。だが、鉄砲の代わりに弓矢を使用すれば、時代はさらに遡ることができる。しかしながら、弓矢は命中率が低いと、トヤ待ちの時には、使用されなかった可能性も考えられる。熊狩りの際も、弓矢ではなく、槍を使用していたといわれている。またトヤ待ちの様子を描いた文献には、鉄砲で獲物を撃っている絵図しかないため、弓矢を使用していたかどうかは不明である。現



図4 雪ノ堂の図 狩猟時に作られる雪室

(『北越雪譜』国立国会図書館所蔵)

在のところ、最古の文献は、江戸時代後期に書かれた『北越雪譜』<sup>39)</sup>である。

人の入るべき程に椀をふせたるやうなるものを雪にて作り、後に入り口をつけ内は洞になし、雁のをるべき方に穴をつくりてそのきたるをまつ。雁は不時にはきたらず、くべき時あり、しもにいふべし。雁を見ればかの穴より銃炮の銃口をいだしてうつ也、かくするを里言にゆきんだうといふ、雪ノ堂也。

図4を見ると雪山に穴を開けてその中に人が1人隠れている。本文によると、その穴から鉄砲を向け、雁を撃つとあることから、この絵図は雁を撃って、もう1人の者が獲物を獲りに行こうとしている場面を描いたものである。

狩猟の雪室が時代的にどれくらいまで遡れるかは不明であるが、今後古文書や絵図などの資料を通して検討していきたい。

#### 4. おわりに

従来の狩猟研究の中において、取り上げられてきた狩猟方法の中では、トヤの時に作る木製

の小屋や狩猟の時に泊まる山小屋が主要な研究対象となっていた。しかしながら、豪雪地域の狩猟方法について論じた研究はみられなかった。それどころか、狩猟に用いる雪室に関する報告書もほとんど存在しない。本稿では、その点に注目し、狩猟時に作られる雪室の事例報告をするとともに、その雪室の地域性について考察してきた。

狩猟時に作られる雪室には①狩猟期間中に泊まるために作る雪室、②獲物から身を隠すために作る雪室の二種類の雪室が設営されていたことが判明した。それぞれの雪室が作られる違いの理由を、その作られている地域の自然環境の違いから考察を行った。A(①あるいは①と②の両方の雪室が作られる地域)を作る地域は、海拔高度の高い河川上流地域に位置し、河川の中、下流地域に比べて耕地が少なく、冬の期間は本格的に狩猟を行っていたのである。それらの地域では、狩猟時にヤマコトバを使い、山の神を山中に祀っており、さらに狩猟の文書が残されている。以上の点から、A地域は山に關す



る仕事、すなわち狩猟が盛んであったことを知ることができる。また、Aの地域ではB(②だけしか作られない地域)の地域の獲物の他に、熊、クラシシなども狩猟対象物としていた。これらの動物は山奥にいるため、泊りがけの狩猟を行った。その狩猟期間中に、洞穴が見つからなかったり、山小屋に帰れなかったりした時に、雪室を作ってその中に泊まった。それはどこでもすぐに作れるという雪の加工しやすい性質から利用されてきたのではないかと推察される。

岩手県川井村、山形県戸沢村、長野県白馬村の3県3村の雪室と只見川流域と野尻川流域の①の狩猟期間中に泊まる雪室は、その利用方法、名称、形の点において類似している。3村は泊りがけで狩猟を行う古い伝統に従って狩猟を行ってきた地域であるかを検討していきたい。さらに、そこに秋田マタギとの交流が存在したのか、その点も今後の研究課題として考えている。以上のように、狩猟の雪室を通して、雪室と地域との関連性を解明していきたい。

## 註

- 1) 雪室とは、雪で作った建物をいう。雪室には、雪穴や鳥追い小屋、カマクラなど種々の名称がある。
- 2) 鳥追いとは田畑に害を及ぼす鳥を追い払う小正月の予祝行事の1つである。具体的に行事の内容を示すと次の4つに分類される。①集落内を回って歌を歌う。②集落の境にいて鳥追い歌う。③隣の集落、又は同じ集落を二分して歌い争う。④雪室の上やその周囲で歌う(後藤 2004: 88)。
- 3) 現在、雪室は1、2月に行政単位で開催される雪祭りの中で作製されている。このタイプの雪室はカマクラと呼ばれ、外形が雪穴型である。
- 4) カマクラの語源には、①カマド説②鎌倉権五郎説③鎌倉幕府説④水神説⑤鳥追小屋説⑥カミクラ説の6説が出されている(稲雄次 1988: 47-50)。

- 5) 薄葉篤蔵は水神まつりの祭具を中心に、明治末期から昭和初期にかけての横手の水神まつりを研究している(薄葉 1954: 36-37、1958: 43-45)。
- 6) 佐川良視は天明年間から文化年間間に雪室が非常に装飾化され、それが明治時代になって火災の危険があるというので禁止され、子供が作る雪室をカマクラと呼び、それと水神祭りが合体して行くことになったと考えている(佐川 1954: 1-10)。
- 7) 狩人の系譜については、柳田國男(柳田1937など)千葉徳爾(千葉 1969、1971、1977、1986、1990など)によって研究されてきた。狩師の始祖は高野派、日光派がある(千葉 1971: 337)。
- 8) 狩猟儀礼に関しては椿宏治(椿 1968: 303-307)や永松敦(永松 1997: 130-151、2005など)千葉徳爾(千葉 1969、1971、1977、1986、1990)などによって進められてきた。狩猟には獲物の祈願、入山、捕獲、解体に伴う個々の儀礼がある(永松 1997: 140)。
- 9) 山口弥一郎や森嘉兵衛は、マタギ集落を研究対象とし、その集落の特性や変遷について論じている(山口 1942、森 1940・A、Bなど)。
- 10) 兎の狩猟方法を論じた研究(天野 1976: 57-81)や秋田の熊狩りの方法を記した研究(武田 1977: 117-132)などがある。
- 11) 巻き狩りとは鉄砲を持った者が、山の上の方に待機していて、セコが獲物を上に駆り立て、上から鉄砲で撃つ方法である。
- 12) トヤ待ちとは山鳥などの獲物が止まる木の近くに小屋を作り、そこから鉄砲で射撃する方法である。
- 13) 只見川流域と野尻川流域は只見町、金山町、昭和村、三島町、会津坂下町、高郷村、山都町の5町2村を言う。その中で、狩猟の雪室が設営されていたのが、確認できたのが、只見町、金山町、昭和村である。
- 14) 『郷土誌』とは、明治44年と昭和7年に、福島県全域で、その郷土の歴史や地理、信仰、習俗などを記録するように訓令が出され、校区単位で作成されたものである。
- 15) 川井町の事例は、芳門留次郎氏(大正9年生)のアンケートの回答による。戸沢村の事例は、

2001年に行った聞き取り調査による。話者は大友義助氏（昭和4年生）である。只見町の事例は、2002年から2003年にかけて実施した聞き取り調査、アンケート調査による。話者は皆川喜助氏（大正3年生）、目黒多一氏（大正13年生）、たまき氏（大正12年生）、五十嵐昭明氏（昭和2年生）などである。金山町の事例は2004年の聞き取り調査による。話者は三瓶敏武（昭和8年生）、渡部守蔵氏（昭和6年生）などである。白馬村の事例は、永沢武（昭和6年生）のアンケートの回答による。

- 16) ユキアナという名称は、鳥追いやサイノカミなどの行事の時に作製される雪室や子供の遊びの時に作られる雪室にも使用される名称である。筆者によるアンケート調査の結果では、北は青森県から南は福井県まで分布していることが明らかになった。
- 17) 2002年から2005年にかけて実施した聞き取り調査による。話者は皆川喜氏（大正3年生）、渡部完爾氏（大正14年生）である。
- 18) 2002年に実施した聞き取り調査による。話者は目黒多一氏（大正13年生）、目黒たまき（大正12年生）である。
- 19) 2005年に実施した聞き取り調査による。話者は須佐信夫氏（大正13年生）である。
- 20) アンケート調査の回答による。回答者は五十嵐昭明氏（昭和2年生）である。
- 21) 2005年に実施した聞き取り調査による。話者は角田佐平氏（大正14年生）、渡部守蔵氏（昭和6年生）である。
- 22) 2005年に実施した聞き取り調査による。話者は渡辺良三氏（大正15年生）である。
- 23) 2005年に実施した聞き取り調査による。話者は五ノ井謙一氏（大正4年生）である。
- 24) 2005年に実施した聞き取り調査による。話者は高橋徳男氏（大正15年生）である。
- 25) 2005年に実施した聞き取り調査による。話者は栗城弥平氏（明治45年生）である。
- 26) 2005年に実施した聞き取り調査による。話者は山内善次氏（大正10年生）である。
- 27) 2005年に実施した聞き取り調査による。話者は五十嵐初喜氏（大正4年生）である。
- 28) 前掲17)

29) 前掲27)

30) 皆川文弥は『田子倉の歴史』においてヤマコトバを記録している。天候、人に関する事、けもの、日用語に分類している。

31) 前掲27)

32) 原本はヤマサキ家（狩猟時に中心となる者）である皆川政一郎氏宅に所蔵されている。

33) 著者は鈴木牧之である。『北越雪譜』は新潟県塩沢町周辺の風俗や自然環境などを記した文献である。本稿では国立国会図書館所蔵本の版本を底本とした。

### 引用文献

- 天野武（1976）：「白山山麓の野兎狩り—雪と人間との関わりを中心に—」『日本民俗学』103、57—81頁
- 稲雄次（1988）：「小正月の分析視点—カマクラの構造」『秋田民俗』14、45—52頁
- 薄葉篤蔵（1954）：「かまくらの水神まつり—その祭具などについて」『横手郷土史資料』27、36—37頁
- 薄葉篤蔵（1958）：「かまくらの水神まつり—その祭具などについて②」『横手郷土史資料』30、43—45頁
- 後藤麻衣子（2004）：「雪室の分布と地域性—鳥追い行事における雪室」『昭和女子大学文化史研究』8、83—94頁
- 佐川良規（1954）：「鎌倉の発祥と語源」『横手郷土史資料』26、1—10頁
- 庄司吉之助編（1979、1980）：『会津風土記 風俗帳』1—3、吉川弘文館
- 武田淳（1977）：「秋田マタギの熊猟とロコモーション」人類学講座編纂委員会編『人類学講座 第12巻 生態』雄山閣、117—132頁
- 千葉徳爾（1969）：『狩猟伝承研究』風間書房
- 千葉徳爾（1971）：『狩猟伝承研究 続』風間書房
- 千葉徳爾（1977）：『狩猟伝承研究 後編』風間書房
- 千葉徳爾（1986）：『狩猟伝承研究 総括編』風間書房
- 千葉徳爾（1990）：『狩猟伝承研究 補遺編』風間書房
- 椿宏治（1968）：「越後のマタギ」『民族学研究』32—

4、303-317頁

永松敦（1997）：「狩猟」、野本寛一、香月洋一郎編『講座 日本の民俗学 5 生業の民俗』雄山閣、130-151頁

永松敦（2005）：『狩猟民俗研究 近世猟師の実像と伝承』法蔵館

森嘉兵衛（1940A）：「奥羽狩猟村落の研究（1）」『社会経済史学』10-4：35-52頁

森嘉兵衛（1940B）：「奥羽狩猟村落の研究（2）」『社会経済史学』10-5：41-56頁

柳田國男（1937）：「山立と山臥」、柳田國男編『山村生活の研究』民間伝承の会、538-548頁

山口弥一郎（1942）：「東北地方に於けるマタギ集落の機構と其の変遷」『地理学評論』18-2、1-30頁

皆川文弥（1957）：『田子倉の歴史』福島県田子倉厚生相談所

付記

本稿は昭和女子大学渡辺伸夫先生、田畑久夫先生のご指導のもとに作成致しました。また、後藤淑先生、大谷津早苗先生にご教示賜りました。さらに、資料収集にあたり、多くの方々にお世話になりました。厚く御礼申し上げます。

国立国会図書館、金山町教育委員会（五ノ井忠道氏）、昭和村教育委員会（小林彌吉氏）、昭和村すみれ荘（佐藤孝雄氏）、昭和村立昭和小学校（本名幸平校長先生）、昭和村役場（佐々木和義氏）、只見町教育委員会（新国勇氏）

五十嵐昭明氏、五十嵐初喜氏、栗城弥平氏、五ノ井謙一氏、三瓶敏武氏、須佐信夫氏、高橋徳男氏、長沢武氏、芳門留次郎氏、皆川喜助氏、目黒多一氏、目黒たまき氏、山内善次氏、渡部完爾氏、渡部守蔵氏、渡辺良三氏

（ごとう まいこ 生活機構学専攻2年）

受理年月日 平成17年9月30日

審査終了日 平成17年12月1日